

## その 18

### 万葉ファンタジア

#### 「歌の学び」



鳥取公演の舞台から

前回は現代の子どもたちの歌の学び、今回は万葉の子どもたちの歌の学び。大伴家持がまだ少年だったころのファンタジアである。

大伴旅人の異母妹で、家持の叔母大伴坂上郎女は、万葉集に長歌と短歌 84 首を残した万葉を代表する女流歌人である。旅人の妻、大伴郎女が亡くなった後は家持の母代わりとして、旅人が亡くなると歌の師として家持に歌を教えたのも、坂上郎女とされている。その娘、坂上大嬢（おおいらつめ）は家持の従妹に当たるが、家持はその後大嬢と結婚することになる。坂上郎女という通称は、坂上の里に住んでいたからとされているが、今回の舞台は、この坂の上の屋敷、家持と大嬢がまだ 10 代の頃のやり取りから始まる。

少年家持役  
加藤記生



坂上大嬢役  
下田麻美

「大嬢は歌が苦手なようだけど、そろそろ歌を習ってもよい年ごろでは？」、「いいえ、私はまだ 13 歳……恋の歌を学ぶには早すぎます」、「いいえ、もう 13 歳、遅いくらいです。マナビは、マネビです」、「なんですか、それは？」、「歌の学びは、まず名人の歌を真似すること、その真似びです」、「家持さま、それは、お母さまの真似びですね？」、「ばれましたか？恋歌の名人坂上郎女の叔母さまから教わりました」、「……では、私も」。

「それでは、まず歌の読み方の真似びです。では、『二二』は何て読みますか？」、「……ニジュウニ、ではないのですか？」、「違います。シです」、「シ……なぜ、シですか？」、「ニ×二は、いくつですか？」、「二二が四（シ）、です」、「そうです。だから、シです。シと読みます」。

「それでは、十六と書いて、何と読みますか？」、「十六ですか？はい、家持さまの歳です」、「はい、そうです。でも、何と読みますか？」、「十六ですか……？」、「四×四は、いくつですか？」、「……四四（シシ）十六、

です。でも、それは、九九の学びで、歌の学びではないのではないですか？、「いいえ、歌の学びです……十六は、シシと読みます」、「シシ？……四四と書くのではダメなのですか？」、「……そ、それは知りません。それでは、シシとは、何のことですか？」、「はい、猪や鹿の肉のことです。シシの膾（なます）は美味しいので大好きです」、「その通りですが……食べ物のことになると、すぐわかるのですね」。

「それでは、次の問題。二八十一は、何と読みますか？」、「二八十一ですか？はて……」、「では、九九を言ってごらん」、「九九八十一、八九七十四、九七六十三……」、「ほら、また間違えた。八九は七十二でしょう。相変わらず、九九も苦手そうですね。……それで、八十一は？」、「……九九？」、「そうです。それに、二を付けると？」、「……ニクク、ですか？」、「そうです……つまり、二八十一は、『憎く』です」。

そう、万葉の時代から、掛け算の九九があった。これまで古代の遺跡から九九を書いた木簡がいくつか出土している。2010年に平城京跡から、長さ16.3センチ、幅1.5センチの小さな木簡が出土したが、これが九九の一部だった。「九九八十一……三九廿七、二九十八、一九如九」という一連の九の段の一部で、当時は、今と逆で、九の桁から数えていたようだ。



万葉の人々も掛け算の学びには苦労していたようで、「九九八十一、八九七十四……」と間違えた木簡も出土している。

外出から帰って、2人の後ろでやり取りを聞いていた坂上郎女が声をかける。

「家持さん」、「あ、叔母さま、帰っていらしたのですか」、「はい、前回お教えしたばかりですから、その二八十一を使った歌は覚えていますね？」、「はい……『憎くあらなくに』のところだけは覚えているのですが」、「はい。では、『憎くあらなくに』は、どのように書かれていますか？」、「二八十一……？」、「このような歌でしたね」。

「若草の 新手枕(にひたまくら)を 枕(ま)き初(そ)めて 夜をや隔てお **二八十一不在國**」

(新妻に初めて手枕をした。一夜だけでもあけたくない。憎いわけではない、可愛くてたまらないのだから)

(巻11・2542)

「『二八十一不在國』、難しかったですか？それでは、次はもっと難しい、動物の名を使った読み方の学びです」、「もっと難しい？……どんな動物ですか？」、「はい、馬とか牛、それに、犬とか蜂……はい、それでは、馬から……『馬声』と書いて何と読みますか？」、「馬の声ですか……？」、「馬は、どんな声を上げてなきますか？」、「……ヒヒ〜ん、となきます」、「いいえ、馬はヒヒ〜んではなく、イーン、となくでしょう」、「イーン……ですか？」、「そうです。だから、イと読みます」、「『馬声』の2字で、イと読むのですか？」、「はい」。

「それでは、同じ馬でも、『追馬』は何と読みますか？」、「『追馬』……？『馬声』が、イだから……『追馬』なら、オ、ですか？」、「違います。家持さんは、馬に乗るのが上手になりましたか？」、「はい、今朝も馬で早駆けをしてきました」、「今日も弟の書持（ふみもち）クンに負けたようですね」、「書持め、叔母さまに告げ口

したな……」、「で、馬を追う時は何と言いますか？」、「ソ、ソ、と言って追い立てます」、「ソウですね。で、『追馬』は何と読みますか？」、「ソ、ソと追うから、ソですか？」、「ソウ、ソと読みます」。

「それでは、『牛鳴』は何と読みますか？」、「牛が鳴く……モ～って鳴くから、モですか？」、「いいえ、牛は、ム～と鳴きます。だから、『牛鳴』は、ムと読みます」、「ム……ですか？……モーって聞こえるんだけどなあ」。

「次は、『蜂音』です。何と読みますか？」、「分かった。蜂は、ブ～んって音を出して飛ぶから、ブだ」、「はい、その通りです。ブです」、「蜂は簡単でしたが……刺されないようにしないと」。

「それでは、今度は大嬢が大好きな犬です。『喚犬』と書いて何と読みますか？」、「母上、それは、蜂と同じで簡単です、犬は、ケイケイと喚（な）くから……ケ、です」、「違います。『喚く』は『なく』という他に、『大声で呼ぶ』という意味もあります。で、犬を呼ぶ時は、なんと呼びますか？」、「マー、マー、って呼びます……だから、マ、でございますか？」、「そうです」。

「それでは、『喚犬』と『追馬』と『鏡』を合わせて……『喚犬追馬鏡』と書くと何と読みますか？」、「『喚犬』がマで、『追馬』がソだから、マソ……カガミだ」、「そうです。どんな鏡のことですか？」、「それなら、私、知っています。美しく澄んだ鏡のことを『真澄（まそ）鏡』と言います」、「そうです。単に『犬馬鏡』と書いて、同じマソカガミと読む歌もいくつかありますよ」、「真澄鏡で見ると美しく見えるのですが、それが犬と馬の鏡ですか？」

「それでは、『馬声』と『蜂音』を使った歌、『馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿』（巻 12・2991）はどう読みますか？」、「『馬声』が、イで、『蜂音』が、ブだから、イブ。そして、『石花』は、う～ん、以前読んだ覚えがあるなあ……そうだ、虫麻呂どのの不尽山の歌……その中に、『石花（せ）の海』があった……だから、セだ。その後は、虫のクモ、そして、『荒鹿』は、アラシカかな……とすると、『イブセクモアラシカ』だ、「残念。正しくは、『イブセクモアルカ』と読みます。意味は、『心が晴れないことだ』、で、歌はその後、『妹に会わずして』と続きます。馬に始まるこの 1 句は、すべて動物で表していますね。詠み手が面白がって戯れて詠んでいるのですよ」。

少年家持役  
加藤記生



坂上郎女役  
紺野美沙子

漢字の音や訓をかりて読み方を表したのが万葉仮名だが、このように面白半分に戯れて書いたものを、文字通り「戯書（ぎしょ）」と呼ぶ。おかげで当時の人々が動物の鳴き声をどう表していたのかが分かるが、オギャー、エ～ン、ワ～ン、シクシク、ワハハ、ウフッフ……人の泣き声や笑い声はどう表現していたのだろう？

万葉びとは、ウフッフ、笑い好きでユーモアを解し機知に富んだ会話と楽しいファンタジアを愛する人々だったに違いない。万葉集にはそんな遊び心が所々に隠されているのが、なんとも楽しい。万葉集の詠み手には、虫麻呂や家持だけではなく、たくさんのファンタジスタや戯作者がいたようである。